

Laban/Bartenieff Movement Studies/System (LBMS)に基づく教授法を用いた授業実践：
ソマティック・ムーヴメント・エデュケーションの授業を題材にして

橋本有子（お茶の水女子大学）
山田美穂（お茶の水女子大学）

I 背景と目的

授業改善・教授法の改善は、教育実践者の日々の課題である。これまで、ダンス領域では受講生の言動に焦点を当てた実践研究や、優れた教育実践者の教授法の研究など、様々な報告がなされてきた。海外では近年、教育実践者の個人的な経験や主観、自己分析などを含めた一人称の実践研究が行われている（Roche 2016; Fernandes 2020 など）。教育学者の佐藤（1996）は、授業研究のうち、教育実践者自身の授業研究において、「主観を尊重した『物語（ナラティブ）的認識』を追求する」重要性を指摘している。身体知・経験知によるところが大きい指導技術は、その多くが言葉になりにくい。しかしながら、実践者自らが、それらの知を言語化することができれば、自身が選択していることの背景に自覚的になり、自己分析力を高め、継続的な授業改善が望めるようになるだろう。また、他者と共有し議論をすすめることもできる。

そこで本研究は、教育実践者／第一発表者が自身の教授法について第三者に語ることで、その内容を可視化し整理することを目的とする。

II 方法

1. 教育実践者の立場、考え方、ツール

1-1. ソマティック・ムーヴメント・エデュケーション

北米で生まれたソマティクス（一人称の知覚で経験を内側から捉える実践および思想）に立脚した動きの教育である。そこでは実践者が、受講者との創造的な相互関係のなかでムーヴメント、言葉、タッチを用いて感覚的な経験を導く（Eddy 2009）。これまで、多くのダンス専門家がソマティック実践に取り組み、ソマティックな知恵をダンス教育に還元してきている。

1-2. Laban/Bartenieff Movement Studies/System (LBMS)

LBMS は、ソマティック・エデュケーションを実現するシステムの一つであり、ムーヴメントの経験を導く言葉の使い方を導いてきた（Eddy 2016）。システム(System)として活用できるLBMSの基盤には活用者の探求・研究(Studies)があるため、LBMSを用いる実践者は自身の身体やムーヴメントの探求を続けている。また、LBMSを構成するムーヴメント言語はそれぞれが世界観をもつコンセプトであり、ムーヴメントの観察のみならず、世界の見方、捉え方にも応用できる。教育実践者／第一発表者は、LBMSの認定資格CMA

を保持し、教育実践全般にLBMSを活用している。

2. 協働的インタビュー

都内の大学の全学共通教養科目、生涯スポーツ「ボディ・コンディショニング」を題材に、共同研究者が教育実践者に、授業の目的、教授内容、教授方法を問うかたちで対話をすすめた。インタビューは合計5回、各1時間行い録音した。

3. 分析の手順

毎インタビュー後に、共同研究者が文字起こしをし、コメントや質問を入れたファイルを教育実践者に渡した。教育実践者は次のインタビューまでにそれを読み、音声も聴いて修正・追加したいことなどを文字や描画を用いてノートにまとめた。教育実践者は、インタビュー#5の終了後、全てを読み返し、繰り返し述べていることや特徴的に浮かび上がってくることを整理した。その後、共同研究者と共有して再整理した。

III 結果と考察

1. 教授サイクルの3段階

1回の授業に対して、プランニング、授業、省察のサイクルがあることがわかった。プランニングは、プレ実践として動きながら流れをイメージし、「ドンって落ちる」身体感覚を到達点としている。授業は、受講生の状態を観察し、それを中心に置きながら自身のプランニングの内容とすり合わせ進行する。授業後の省察では、授業時の感触と受講生の気づきノートの内容を合わせて振り返り、次週のプランニングのための材料にしている。

2. 感覚的な目標・指標「マーブル」

教育実践者は授業内で、「マーブル」と呼ぶ現象（色々なものが混じり合う状態）が生じることを目標としていることがわかった。色々なものには身体・心・精神、内側・外側、様々な知性などが含まれる。プランニング時には教育実践者にプレ・マーブルが生じ、授業時には受講者にマーブルが生じることを目指し、省察時には授業内でマーブルが生じたかどうかを指標にしている。

3. LBMSの活用法

3段階全てにおいて、LBMSを活用していることがわかった。プランニング時には教授内容のコンセプトや指導言語として、授業時には受講生と自身の状態や動きを観察するためのツールとして、また省察時には、マーブルの質をLBMSで分析し、その結果を次週の授業計画に活かしている。

IV まとめ

教育実践者は教授サイクルの3段階を枠組みとして、授業内でマーブルが生じることを目標とし、LBMSをプランニング、授業、省察の各段階で活用していることがわかった。教育実践者が教授法を可視化することは、自身に新たな発見をもたらす。今後、他者との議論を生み、そこで得られる知見が実践の場に還元されることが期待される。